

米水津村の出稼(二)

反物行商

市野瀬 仁

(会員・佐伯市長島)

反物行商 (二)

浦代地区の人々が北海道へ行商に行った以前から、色利地区の人々は主として、宮崎・鹿児島県へ行商に行っていた。

それでは順序として、宮崎県の成立過程を「宮崎県の歴史」によって見ることにしよう。

宮崎県の誕生

明治四年(一八七一)の廃藩置県の年、日向の国は大淀川を境として、その北を美々津県、南を都城県とした。さらに明治六年に、美々津、都城の二県を廃して日向一円を宮崎県とした。ところが、人口の少ない県は隣接県に統合して県勢を強化するという主旨のもとに、明治九年に宮崎県を廢して鹿児島に合併した。その翌年、西南戦

争が勃発して県下はあげて戦場となり灰燼に帰したのである。

しかし、これにはいくつかの不合理な点があった。第一に、日向国は大隅、薩摩国よりも二倍も土地が広いのに反して人口は少い。県議會議員は定数も全体の三分の一しかない。

第二に、町村役場の数は薩摩は一里四方に一つあるのに、日向は五里四方に一つしかないので不便であった。

第三に、鹿児島県庁が遠すぎて、何かにつけて不便であった。

第四に、土地の広い日向は多額の地租を納めねばならないわりに県費を利用する人は少なかった。

こうした矛盾に満ちた鹿児島県政に対して、明治十六年南諸県郡(志布志・松山・大崎)を鹿児島県に残すこ

とで宮崎県は独立したのである。

大分県は明治四年に、中津県（豊前）は小倉県に編入されたが、明治九年に福岡県のうちに下毛・宇佐の二郡が大分県に分合されて今日の大分県の地域が確定した。これに比べて、宮崎県の成立は継子扱にされ不合理の極みであったことがわかる。

大分県の出稼者の出稼先（大正14年）

府県名	男	女	計	出稼者 に占める 比率	総め 率
福岡	7,499人	5,149人	12,648人	49.64%	
大分	924	1,334	2,258	8.86	
宮崎	1,193	703	1,896	7.44	
兵庫	359	731	1,090	4.28	
朝鮮	702	378	1,080	4.24	
熊本	686	382	1,068	4.19	
長崎	697	99	796	3.12	
東京	446	202	648	2.54	
高知	555	25	580	2.28	
高山	316	161	477	1.87	
山台	219	144	363	1.42	
北海道	269	77	346	1.36	
北海	196	69	265	1.04	
神奈川	125	90	215	0.84	
賀野	154	58	212	0.83	
長野	149	56	205	0.80	
鹿児島					
計	15,286	10,194	25,480	99.98	

※中央職業紹介事務局『大正十四年出稼者調査』付表より作成原表には集計上の誤りが数カ所あったが、これは訂正した。

・宮崎県行商

宮崎県で行商した米水津人の数は定かなことは分らないが、後に記す木材関係その他での出稼者も多かった。宮崎・鹿児島行商の方は北海道行商とちがって、距離も近いし、貸付で年二回払いということもあって、所の人となじみになりやすく、集金が堅実であった。それに、衣類の品も、普段着、仕事着の実用的なものが多かった。現在、尼崎市に住んでいる広田（旧姓片嶋）みどりの手記をみると、「宮崎県での行商は佐伯から大阪商船に乗り美々津に上陸して、馬車で富高（日向市）・神門（南郷村）上椎葉・下椎葉・桑木原に行きました。神門から山越えて山小屋に泊りました時、色利の夫婦が住んでいて馬を使って荷物運びをしていました。母は宿屋に泊ると手廻しミシンで手甲当を縫い、着物、腰巻等を縫って売って歩いたら、すぐに売れてしまったと云います。売る品物の種類は、緋・銘仙・木綿・ネル・モス・木綿編等でした。仕入先は、久留米・宇和島・佐伯船頭町の菊池呉服店からでした」とある。

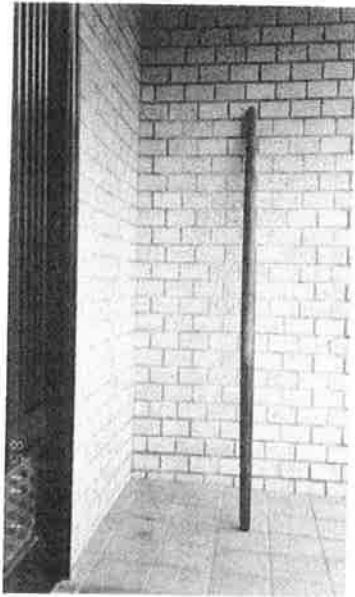
竹野浦の福永クニエの母は、高千穂方面を十六年間も行商した。その苦勞話を聞いておるから、当時使った

天秤棒^{びん}を家の宝としているという。以上のように宮崎県の行商でも米水津村の各地から出かけていることが分る。

鹿児島県の成立

明治十年、西南戦争をおこした鹿児島県は、一国一城の半ば独立国の態であったことは皆の知るところである。「鹿児島県の歴史」によって、三つの特徴を知ろう。

第一に、明治二十二年（一八八九）の市町村制の施行にあたって、政府の方針は「凡そ三百戸ないし五百戸を以て標準」としたが、鹿児島県ではだいたい藩政時代から郷を単位として編成した。その結果、明治二十三年の統計では一村平均一四四五戸で標準の三〜五倍である。



そうでもしなければ町村の財政規模を満たすことができなかつたのである。そこで、全国にまれにみる大きな町村が出現した。

第二に、士族ならでは夜の明けぬとされたことを適確に示す次の表を参考にしよう。このように、郷士^し地主^し役人・議員・教員・警官・軍人・医者という社会のパターンが昭和二十一年の農地解放まで続いた。士族意識^しの優越感^{ゆうえつ}は滑稽^{くわい}なほどであった。

第三に、藩政期に西目^{にしめ}（薩摩）地方は狭郷で耕地の割に人口過剰で小挽^{こひ}・桶結い^{おけむす}・日傭^{ひよ}とり・奉行人^{ほうぎん}など農業外の職業で生計をたてた人が多かった。東目^{ひがしめ}（日向・大隅）は寛郷地帯で人口が少なかった。とくに庄内^{しやうち}（都城市）地方は広野が人を待っていた。サノサ節^{さのさぶ}にもうたわれたように『行こうか参ろうか庄内様行こうか、庄内^{しやうち}の萱^{かや}ん原^{はら}にや米がなる』と新開の地を求めて移動した。その上、西目人間は勤勉利口^{きんけん}であったから麓^{ふもと}と在^あのふるい停滞^{たいど}的な社会の空隙^{くわい}に割りこんで産をなした。

このような商業の処女地帯の鹿児島県は、先進地の商人からみて、羽翼を伸ばすにもかつこうの地域であったのである。わが村米水津の地も先進地どころか、食うた

明治22年から25年
ごろの県會議員数

族籍		士族	平民
府県			
神奈川	1人	56人	
埼玉	1	38	
千葉	3	50	
群馬	4	56	
新潟	4	60	
栃木	5	32	
長野	6	32	
岩手	7	60	
宮城	8	56	
山形	8	23	
秋田	9	21	
茨城	10	48	
福島	10	50	
青森	12	18	
鹿児島	37	3	

めに命がけて反物行商をしたのであった。しかし、彼の地がこうまで深刻な状況の中にあつたことは知らなかつたのではなからうか。

鹿児島県行商

色利では出発にあつて立岩神社でお籠こもりをして行く。春五月の菜種油の収穫、秋は九月の米、甘藷かんしょ（しょうちゅう）の収穫金をねらうて行く。その間は行商して契約をし、五、六月と、十、十一、十二月にかけて行商かたがた集金をする。一度行商に行くと、家に帰るのは盆、正月だけだった。これは宮崎県行商も同じことだった。また販売する品物もほぼ同じであった。

行商中の服装は、柳行李やなぎばこを前後につるして、ナスといふ天秤棒で担ぐ。足元は草履。やがて地下足袋をはく頃

から風呂敷で背負う。自転車を利用する頃になると、ズボンに兵児帯へこせびを締めての出立である。

鹿児島行商は大阪商船で土々呂に着き、都城へ向けて馬車で行く。熊本の多良木に足をのばす人もいる。西目地方の薩摩の川内せんない、宮之城みやのしろ付近を周る人もいる。気位の高い士族の金持へ銘仙を売りつけたりする。しかし、大隅の鹿屋かのや・串良くしら・大崎おほさき・志布志地方が主であった。

当時、大正・昭和にかけて、大工賃が五十銭のとき、旅館賃も五十銭位であった。反物一反が三円五十銭、銘仙は十二円もした。先づ南の各地を歩いて驚くことは未開の地であるということであった。宮崎県でも言えることだが、行商にかぎらず、他所よその人を珍しがり、鄭重ていじゆうに扱ってくれた。仕事中でも、やめて家につれて行き、お茶をすゝめて商談する。実に純朴であつたという。

色利の塩月司（八二才）は大正から昭和にかけて、北海道行商もし、鹿児島行商の経験を多くもつ、日豊線（昭和七年十二月十八日貫通）が完通するまでは、小倉まで行き、鹿児島本線（昭和二年十月十七日貫通）で行つたこともある。兵役をすませ、昭和十二年日中戦争が始まった。衣料品が切符制になるまで、反物の残つたもの

第参号

太物行高鑑札

豊後國南海部郡浦代浦
高宮豊太郎

明治十三年二月廿日

大分縣

南海部郡

高宮豊太郎
御所印

を鶴崎方面にまで売りに行った。

また、塩月司と友達でもある色利の富松彦一（七九才）は、行商が縁で、鹿児島県肝付郡串良町岡崎に定住している。彼の話すには、「家族の人数は多く、貧しくて、土地の狭い米水津商人の二男・三男は、三十才頃までは家の為に働くが、なんとかして独立した呉服屋を持ちたい一念であった。そして、志なつて私のようにこちらに永住している者が十数人はいる」と。

鹿児島県行商中、一番米水津商人を驚かしたことは、衣類の生産地の宇和島・八幡浜等の伊予商人二十人ばかりを乗せた船が何艘か港につき、物量作戦を展開することだった。その時の米水津商人はじつと小さくなっていた。伊予の人の通った後は草も生えぬ」といわれているが、その現実をまのあたりに見たと語っている。

島々を商った人々

民俗学の第一人者、柳田国男の「海上文化」の中に、「伊予の松前の方は日本内地だけでなく大陸へ渡って居る。女房が主体で、阿波の阿部村、愛媛県の松前村の二箇の女行商人は特筆してよい」と書いている。

それほどでなくとも、さきの北海道行商で活躍した浦代の永野タセ（故人）や宮城善吉（八八才）の文、宮城源吉は明治三十年代対馬まで行商に行ったと語っている。浦代の高宮豊太郎は明治十六年、宮崎・鹿児島方面へ行商に行った「太物行商鑑札」を残している。

当時、行商で財をなした家が米水津村に何軒かあり、今でも大きな構えをしているのをみかける。また、行商によって、佐伯市内や県外で裕福に暮している家もあるときく。米水津村の人が多数に、しかも長年行商ができたのは、対岸の宇和島・八幡浜という仕入先があったからに外ならない。しかし、南海部郡の上浦町から鶴見町、米水津、蒲江町に至るまでの海岸町村に、米水津村の反物行商のように、多数の集団があった町村はない。米水津村だけが伊予に近いわけでもなし、北海道や関西に他町村と違った地理的原因はなにもない。距離という空間を越した、人間と人間とが結んだ何かの縁が、衣類を媒介として、このような特異な現象を生み出したことに、大きな驚きと共に興味をもたざるを得ないし、今後の研究の課題でもある。

宮城善吉（浦代）

・語り手

塩月司（色利） 富松彦一（鹿児島県串良町）

福永クニエ（竹野浦） 広田みどり（尼崎市）

（旧姓片島）

・印刷ミス

前号の30頁の上段・日野浦（鶴見町）

の行商八十人は八人が正しい。

・この文中に誤り若しくは補足する点がありましたら、お手数ですが、ご連絡下さい。

・大分県南海部郡米水津教育委員会 村史編さん室まで。

